



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## ロバート・ヘンリソン作 『クレセイドの遺言』

著者	安藤 光史, 西納 春雄
雑誌名	主流
号	49
ページ	133-161
発行年	1988-03-20
権利	同志社大学英文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014994">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014994</a>

## ロバート・ヘンリソン作『クレセイドの遺言』

安藤光史 西納春雄訳

## 序

ロバート・ヘンリソンについてはその生没年すらも定かでない。ヘンリソンとはほぼ同時代に活躍したスコットランド詩人、ウィリアム・ダンバーの『詩人を悼む』によって、15世紀の後半に活躍した詩人であったこと、また彼自身の作品の扉書きによって、彼がスコットランドの勅許自治都市ダンファームリンのグラマー・スクールの教師であったことが伺い知れるだけである。当時のダンファームリンは、スコットランド自治都市の中でも特に栄えた町であり、この町のグラマー・スクールは歴史と伝統のある学校であったようだ。その学校の教師となったことから、そして彼の作品から判断して、ヘンリソンはかなりの学識を身につけていた人物であったに違いない。大学に至るまでの教育を受けていたようであるが、その大学を特定できるだけの資料はない。

作品における彼の語り口、題材の取り扱いはいずれも真面目で、極めて教訓的である。彼の『寓話集』には当時の世相への辛辣な諷刺も見られるが、作品全体を通じて時に滑稽、諧謔の風が見えることはあっても、卑俗に墮することは決してない。彼は作詩に際して、ジェイムズⅠ世の得意としたライム・ロイアルを好んで用いた。

ここに取りあげた『クレセイドの遺言』は、チョーサーの作品の続編としてヘンリソンが創作したものである。トロイラスとクリセイダの物語は、チョーサー、ヘンリソン、ドライデン、シェイクスピアの手になる作品が、それぞれの作家の個性と時代思潮とを反映したものとして有名であるが、特

にこのヘンリソンの作品は、短いながらもその中に、中世的世界観を踏まえた悲劇の世界を構築しつつ、クレセイドの内面の苦悩と、死の直前での悔悟と自己認識を描いて、中世的枠組みの中に近代を息づかせ、その意味で中世から近代への過渡期的時代精神の縮図として非常に重要な作品であると言える。

この詩は86連、616行より成り立ち、そのうちの「クレセイドの嘆き」の部分7連（407—469行）を除いた部分を7行一連のライム・ロイアルで統一している。本訳稿では、この原文を日本語の散文に訳した。底本として用いたテキストは Denton Fox, ed. *The Poems of Robert Henryson*. Oxford: The Clarendon Press, 1981. である。語義解釈にあたっては、*OED*, *MED*をはじめ、数々の注釈書、解説書、現代英語訳を参照したが、紙数の都合もあり逐一その名を記すことはしない。ヘンリソンの作品の邦訳としては、鍋島能正訳『ロバート・ヘンリソン「イソップ寓話集」』（弓書房 昭和61年）がある。訳文の調子、語義解釈のうえで参考にさせていただいた。訳注は、紙数の都合もあり、最低限に押さえた。読者が中世的世界観を既知としていることを前提として、特殊な内容、表現に限り注をほどこした。なお、固有名詞の表記は、原則として現代英語式発音によった。

すべての翻訳が、翻訳者の解釈の上に成り立っているように、本訳もまた、訳者の作品解釈に立脚している。訳者自身を含めて、一人でも多くの学究の研究の踏み台になれば、と願いつつ本訳業を提出する次第である。

### 『クレセイドの遺言』

もの淋しい季節は、悲しい物語に  
似つかわしく、相応すべきもの。  
私がこの悲劇を書き始めたのも、まさにその頃であった。  
太陽が白羊宮にある四句節の半ば、  
天候は非常に厳しく、

北の空から雹が降り、  
私は寒さをこらえきれないほどであった。

だが、そんな寒さの中でも、  
私は自分の小さな礼拝堂から動かなかった。その時、  
日輪はすでにそのきらめく光を消して、地の下に隠れようとしていた。 10  
そして、輝く明星、  
金星ヴィーナスが昇り、  
その<sup>きん</sup>金色の顔を真西に見せて、  
今まさに沈もうとする太陽神フィーバスと向かい合った。 1

その星の光が、ガラスを通して明るく差し込んで来て、 15  
私は身の回りをすっかり見ることができるほどであった。  
いつしか北風が大気を清め、  
垂れ籠めた雲を空から掃き清めていた。  
霜が凍てつき、北極からは  
突風がひゅうひゅう音をたてて吹いてくるので、 20  
私は心ならずもその場からの退散を強いられた。

私はかつて忠誠を誓った  
あのヴィーナス、愛の女王に、  
私のうち萎れた愛の心を元気づけてもらいたく思い、  
そのためこの高貴な女神に 25  
恭しく祈りを捧げようと思っていた。  
だが、折しもの厳しい寒さのためそうもできず、  
私は自室の暖炉の傍らへと移動した。

愛の思いは熱いものではあるが、  
老いた身には若者ほどにはたやすく燃え上がらない。 30  
若者の血潮は激流のごとくに流れるが、  
老いの身では気力も萎え失せてしまっている。  
そんな老人には火にあたることが最良の薬なのだ。  
自然の力が損なわれた時、それを医術で補うことを私はよく心得ている。  
自然の学にも医の術にも、いずれにも私は経験を積んできたからだ。 35

私は火に薪をくべると体中を暖めた。  
そして酒を一口含んで体を元気づけた。  
こうして寒さから十分に身を守った。  
冬の夜長を短くするために、  
私は——他の慰みごとには目もくれず——一冊の書物を取り出した。 40  
それはかの誉れ高き偉大なる詩人チョーサーの手になるもの。  
美しきクレセイドと、名高きトロイルスの物語であった。

そしてその中には語られている。ダイオメイドが  
あの輝く柔肌の乙女クレセイドを我がものにした後、  
トロイルスは気も狂わんばかりになって、 45  
色青ざめて泣き崩れた様子が。  
そして絶望のために涙を流すかと思えば、  
また希望もわいて喜び勇みもした様子が。  
こうして彼は悲喜こもごもの日を過ごしたのであった。

彼はクレセイドとの約束に大いに元気づけられて、 50  
きっと彼女がトロイに戻って来ると信じた。  
それを彼はこの世の何にもまして求めたのだった。

彼女こそ彼の恋するただ一人の女であったから。  
しかし彼女が帰ってくるという日時も過ぎ去ると、  
悲しみが、不安と憂鬱に沈む  
彼の傷ついた心を押し潰した。 55

彼の苦しみについては、私がここで繰り返す必要はない。  
偉大なチャーサーがこの書物の中で、  
すぐれた言葉と見事な韻律を用いて  
彼の懊悩を書き記しているから、それをご覧になるがよい。 60  
眠気を晴らすために、私はもう一冊の書物を取り出した。  
その中に私は、哀れな最後を遂げた  
美しきクレセイドの悲惨な運命を見出したのである。

チャーサーの書いたことすべてが真実であるなどとは一体誰が知りえよう  
か。

また、このもう一つの物語にしても、 65  
果たして信頼できるものなのか——あるいは、  
いずれかの詩人によって新たに創作されたもので、  
その詩人が、創意によって、あの美しいクレセイドの嘆きと悲しい末路を、  
彼女がどんな辛酸を味わい、どのように死んでいったかを  
伝えようとしたものであるのか——私にはわからない。 70

ダイオメイドはクレセイドを散々に弄<sup>もてあそ</sup>んで、  
彼女に飽きてしまうと、  
今度は別な女に欲望を移し、  
クレセイドに離縁状を送りつけて  
彼女と手を切ってしまった。 75

こうして見捨てられたクレセイドは、ひとりさまよい、  
宮廷に入って娼婦になったということだ。

おお、麗しのクレセイド。トロイとギリシアの花とも、  
美の典型とも言われたおまえ。一体どのような運命の悪戯<sup>いたずら</sup>で  
おまえは女の慎みを汚したのか。

80

肉の欲に溺れ、  
猥らな快樂を求めて、淫婦のごとく  
ギリシア兵の間をうろつき回るのか。  
哀れ、おまえがこんな境遇に落ちねばならないとは。

だが、たとえ人がおまえの弱さをどのように判断しようとも、  
またどのように侮蔑の言葉で非難しようとも、  
私はおまえの女らしさ、知恵と美貌とを  
できる限り弁護しよう。

85

これらを皆、好き放題に滅ぼしたのは、ひとえに運命の仕業であって、  
決しておまえ自身の罪のためではなかったのだ。  
なのに、それを何とひどい言葉で責めるとは。

90

こうして慰めも救いも奪われた

麗しのクレセイドは、  
ひそかに、供の者も護衛も連れずに、  
身をやつし、街を遠く出て、  
一、二哩<sup>マイル</sup>離れたところにある立派な館へとやってきた。  
そこには、今はギリシアの陣営内に起居する  
父のカルカスが住んでいた。

95

カルカスは娘を見ると、なぜここに来たかを問うた。

娘は深い溜め息をついてこう答えた。

100

「ダイオメイド様は、ご自分の欲望を遂げてしまわれると、  
私に飽き、もう私を望まれなくなったのです。」

カルカスは言った。「娘よ、そのようなことで泣くのではない。  
ことは万事うまく行くであろうから。

とにかくよく来た。おまえは大切な客人だ。」

105

この老カルカスは、当時の習わしに従って、  
祭司としてこの神殿を守っていた。

ここにはヴィーナスとその息子キューピッドが祀られていて、  
彼の部屋はそのすぐ隣にあった。

クレセイドは悲しみに胸が一杯になると、  
この神殿に出かけて行って祈りを捧げた。

110

やがてある祭日とはなった。

土地の習いに従って、遠近の人々が  
供え物を携え、敬虔な心持ちで  
朝のうちからこの神殿にやってきた。

115

だが心の重いクレセイドは  
どうしても会堂に入っていく気にはなれなかった。  
自分がダイオメイドのもとを追い出されたことを  
人々に気づかれはしないかと恐れたからである。

それで彼女は人目につかない小さな祈禱室へ入り、  
我が身の悲しい運命を嘆こうと思った。

120

彼女は後ろ手に扉をしっかりと閉めると、



急いで剥き出しの膝を床につけ、  
 ヴィーナスとキューピッドに向かって  
 怒りにまかせて叫んだ。

125

「ああ、あなた方には犠牲をお供えましたのに。

あなた方は以前、神託として、  
 私がトロイの中で一番愛される女となることを約束してくださいました。  
 なのに今、私は捨てられ、惨めな女になり果ててしまいました。  
 私の喜びはことごとく悲しみが変わってしまいました。  
 一体誰が私の手を引いてくれますの。一体誰が私を守ってくれますの。  
 ダイオメイドからもトロイルス様からも、  
 疎ましい邪魔者として見捨てられてしまった今となっては。

130

ああ嘘つきのキューピッド、みんなおまえがいけないのです。  
 それにおまえの母親、あの盲目の愛の女神<sup>2</sup>とが、  
 おまえたちはいつだって、私の顔には愛の種が蒔かれていて、  
 それがおまえたちの助けと恵みのおかげで、  
 花と咲くのだ<sup>3</sup>と私に信じ込ませてきました。  
 なのに今は、ああ、その種も霜に傷められ、  
 こうして恋人からも見捨てられ、独りぼっちになってしまいました。」

135

140

こう言い終わると、激しい興奮のあまり  
 彼女は気を失って倒れた。彼女はそこでひとつの夢を見た。  
 彼女は自分の倒れているところで  
 神々の王であるキューピッド<sup>4</sup>が銀の鈴を鳴らすのを聞いたように思った。  
 その音は天国から地獄まで、どこにいる者にも聞こえるであろうと  
 思われた。

145

その鈴の音を聞いて、七つの遊星の神々が  
それぞれの天球層から降りてきて、キューピッドの前に集まった。

彼らはこの世の生きとし生けるものすべてを支配する力を備え、  
その大いなる影響力によって、  
天候も風も、また移ろう運命をも支配し、操るのだった。 150

まず最初に土星の神サターンが意見を述べた。  
彼は礼儀をわきまえぬ無頼漢で、  
キューピッドには敬意も払わず、  
不機嫌そうに、険しい顔つきをしてやってきた。

その顔はしわだらけ。顔色は鉛色で、 155  
顎はがくがく震え、歯をかちかちと鳴らしていた。

目は垂れて、顔の中に深く落ち窪み、  
鼻からは鼻水がじくじく流れ落ち、  
唇は血の気なく、頬は痩せこけていた。  
髪の毛から垂れ下がる氷柱は 160  
驚くほどの大きさで、槍の長さほどもあった。

汚らしくもつれた灰色の髪の毛が  
帯のあたりまで垂れ下がり、白い霜に覆われていた。  
彼の上着と外套は全くの灰色で、  
そのくたびれた服は風にはたはたとはためいていた。 165

一方の手には強弓を携え、  
腰帯の下には鋭い矢の入った矢筒を着けていた。  
その矢羽根は氷で、やじりは雹の粒でできていた。

次にやってきたのは木星の神ジュピター。彼は美男で愛想がよい。

彼は天空の星の長であり、

170

生きとし生けるものの養い親である。

彼の父のサターンとは大いに異なり、

りりしい顔立ちに艶やかな額をして、

頭上には、あたかも五月を思わせるような、

とりどりの美しい花で作られたすばらしい花輪を戴いていた。

175

彼の声はりと響き、目は水晶のように澄み、

髪の毛は黄金の糸のように輝いていた。

彼の上着と外套は鮮かな緑色で、

襦まじにはすべて金の縁取りふちがほどこされていた。

腰には立派な剣を下げ、

180

右手には鋭い槍を持ち、

それで彼の父の怒りを我々から払いのけるのだった。

彼の次に火星の神マーズがやってきた。

彼は怒り、鬭争いさかい、諍いさかい、不和の神であり、

戦う時は烈火のごとくに荒々しい。

185

頑丈な鎧と兜、鎖帷子に身を固め、

腰には赤錆の浮いた大太刀を下げ、

手にもまた赤く錆びた長剣一振りを持ち、

顔を歪めて怒りの言葉を吐いた。

剣を振り回しながら彼はキューピッドの前にやってきた。

190

顔は真っ赤、睨にらみつける目はぞっとするほど恐ろしい。

牙を研ぐ熊のように。

口元に泡を吹いていた。

彼は気の短い男で、腹を立てると自制心を失い、  
けたたましく角笛を吹き鳴らした。

195

するとこの戦いの合図は全世界を震撼させた。

続くは光の源、<sup>とも</sup>灯し火である美男の太陽神フィーバス。

彼は人と獣の、花と果実の

優しい養育者であり、夜の追放者でもある。

彼はその動きと影響力によって

200

この地上のものすべてにいのちを与える。

彼の慰めがなければ、

この世の被造物はすべて息絶えて無に帰さねばならない。

王として彼は二輪戦車を駆った。

ある時フェアアトンがこの戦車を御し、その軌道を外したことがあった。205

彼の素顔はあまりにまばゆく、

直視するならば必ずや視力を損なうであろう。

燦然と燃え輝くこの黄金の戦車を、

軛くびきにつながれた毛色の異なる四頭の馬が、

休むことなく、疲れも見せずに天球を引いた。

210

第一の馬は栗毛で、たてがみはバラの花の赤。

エーオスと呼ばれ、戦車を東の空へと引きあげる。

第二の馬は名づけてアイトーン、

純白で、天頂へと駆け上がる。

第三の馬はフレゴーン、火のように熱く猛々しい。

215

第四の馬は黒く、ピロイースと呼ばれ、

フィーバスを海へと引き降ろす。

その場には、かの美貌の女神ヴィーナスも来ていた。

彼女は息子キューピッドの訴えを支援するため、

そして彼女自身の訴えを起こすためにやって来たのだった。 220

彼女は半身緑、半身黒という派手な装いで、

黄金色の髪を<sup>くしげず</sup>梳り、後ろで分けていた。

彼女の顔は激しく変化し、

貞女の顔を見せるや否や、淫婦の顔に変わった。

微笑みながら彼女は人を欺いた。 225

思わせ振りの<sup>まなざ</sup>眼差しで挑発しておいて、

突然態度を一変させ、

怒った毒蛇のように

憎悪に満ちた言葉で咬みつくのだった。

注意深い人は、彼女のこのような移り気に気づくはずだ。 230

彼女は片目で笑い、片目で泣くことができた。

その移り気の証拠には、

ヴィーナスの支配する肉欲の愛は、

甘いかと思えば苦く、

たいそう浮気で変わりやすい。 235

苦悩に満ちた喜びと偽りの快樂が交錯し、

熱いかと思えば急に冷め、喜びはすぐ悲しみに変わる。

緑の若葉のように勢いづくかと思うと、たちまち萎れ、枯れてしまう。

次にやって来たのは、書物を手にしたマーキュリー。

彼はまさに雄弁、修辞に長け、  
言葉は巧みで丁寧だった。  
物をしたためるためのペンとインクの用意を欠かさず、  
詩を作って愉快地歌った。  
彼の帽子は赤色で、房のついた縁飾りがぐるりと頭を飾っていた。  
その様はちょうど古風に装った詩人のようであった。

245

彼は箱を幾つか携えていた。その中には選りすぐりの練り薬と  
消化を助ける甘いシロップ、  
調薬士の使う香料と  
体に良い甘い薬がどっさり入っていた。  
彼は医学の博士で、その身分にふさわしく、  
毛皮をあしらった赤い外套を着ていた。  
温厚実直で、一言なりとも嘘をつくような方ではなかった。

250

彼の次に月の女神シンシアがやってきた。  
到着は最後だが、天球を巡る速さではかなう者はない。  
彼女は色黒で、三日月の頭飾りをつけ、  
夜に出歩くのを好む。  
顔は鉛のような土気色で、決して明るいものではなかった。  
というのは、彼女の光はすべて兄の太陽からの借りもので、  
彼女自ら光を放つことは絶えてないのだから。

255

彼女の外套は灰色で、一面に黒い斑点があった。  
その胸元には一人の男の姿が詳細に描かれていた。  
男は荆棘を一束背負っていた。  
男はその盗みの罰として、それ以上天国の方へは昇れないのだった。

260

こうして彼ら七神が集うと、  
一同は合意のもとにマーキュリーを  
会議の長に選んだ。

265

誰であろうと、その場において、彼の美辞と雄弁に  
耳を傾ける気持ちがあったならば、  
修辞の技法、すなわち短い説教の中に深遠な教訓を盛ることを  
学ぶことができたであろう。  
彼はキューピッドの前でひょいと帽子を取り、  
このたびの召集の理由を尋ねた。  
そこでキューピッドは自分の訴えを述べた。

270

「方々、」とキューピッドは始めた。「何人であろうと、  
自分の神の名を、言葉において、あるいは行為において冒瀆する者は、  
すべての神々を侮辱することになるのです。  
そういう輩<sup>やから</sup>は、厳しい罰を受けてその償いを行うべきです。  
私はこれを、あの自堕落女のクレセイドについて言っているのです。  
あの女は一時、私のおかげで最も愛される女となりましたが、  
私と母を悪し様に罵ったのです。

280

身に降りかかった大変な不幸については、  
私はその原因であるとし、さらに  
私の母を盲目の女神だなどと  
散々に罵詈雑言を浴びせたのです。  
そうして、自分の淫らで汚れた生活を  
私と母のせいにしたのです。  
あの女には他の誰にもまさる恵みを施してやったというのに。

285

皆様方は崇高なる七神、  
天上の叡智を身につけておられる方々です。  
高貴な身分の我々に対してなされたこの大いなる侮辱には、  
290 厳罰をもって応えねばならないと私は考えます。  
神々に対してこのような冒瀆がなされたことはかつてなかったのですから。  
私自身のみならず、皆様方のおんためにも、  
あの女への復讐にどうか力を貸していただきたい。」

マーキュリーはキューピッドに答えて進言した。  
295 「王よ、クレセイドへの罰の決定は、  
最も高い位置の遊星の神と  
最も低い位置の遊星の神とに  
委任されるがよろしいかと存じます。  
すなわち、サターン殿とシンシア殿とに。」  
300 キューピッドは答えた。「このお二方に委任することに異存はない。」

こうして土星の神と月の女神は  
事を充分に吟味すると、次のように判決を下した。  
キューピッド、そしてヴィーナスに対して行った  
明々白々な侮辱の故に、  
305 クレセイドは一生涯その罰を受けること、  
すなわち、不治の病に犯されて、  
すべての男達から忌み嫌われるべきことを決定した。

サターンは、この残酷な判決を手にして、  
悲しみに倒れ伏すクレセイドのもとへ降りてきた。  
310 彼は霜の降りた笏を彼女の頭にあてがうと、



判決に従って次のように述べた。

「輝く美貌とすぐれた容姿、  
多情な血と金色の髪を、  
私は今、おまえから永遠に奪い取る。

315

私は、おまえの幸福を  
あらゆる悲しみの母たる憂鬱に変え、  
おまえの体の暖かさと瑞々しさを冷たく干からびさせる。  
おまえの高慢、快樂と好色を  
重い病に変え、榮華と富とを  
死の貧困に変える。おまえは貧苦にあえぎ、  
物乞いとして死ぬがよい。」

320

おお、残酷なサターンよ、敵意と怒りの。  
あなたの判決は厳しく、悪意に満ち満ちている。  
何故クレセイドに哀れみをかけようとはされないのか。

325

彼女はとても可憐で、優しく、愛らしい娘なのに。  
判決を取り下げ、慈悲をお示してください——

もっとも、あなたがそうされたことなどかつてなかったことだが——その内  
容からして、  
これが報復を目的としてクレセイドに押しつけられた判決であることは明白  
だ。

サターンが去ると、次にシンシアが

330

その座から速やかに降りてきて、  
倒れ伏すクレセイドの傍らで彼女に下された判決文を読み上げた。  
その最終判決は以下のとおりであった。

「私はおまえから体の温もりを奪う。  
おまえの病には治療の術はない。  
おまえは余生を悲嘆のうちに過ごすがいい。

335

私はおまえの水晶の目を血で濁し、  
澄んだ声を不快なしわがれ声にし、  
美しい肌を黒斑でおおいつくす。  
そして顔には青黒い腫れ物を作ろう。  
おまえの行く所、人は皆逃げ出すであろう。  
おまえはこうして業病病みとなり、鉢と鳴子を手にして、  
戸口から戸口へと物乞いに歩くがいい。」

340

この忌わしく不気味な夢が終わると、  
クレセイドは目覚めた。  
すると法廷と神々は霧散した。  
彼女は立ち上がると、  
よく磨いた手鏡を取り、己の姿を眺めた。  
その顔つきの余りに醜い変貌を見て、  
彼女の心がどんな悲しみに打たれたか、一体誰が知ろう。

345

350

激しく泣きじゃくりながら彼女は言った。「一体これはどうしたこと。  
悪口を言って気難しい神様を怒らせてしまったのね。  
私の身にこんな災いが降りかかるなんて。  
神様を冒瀆したからこんなひどい仕打ちを受けたんだわ。  
この世のすべての喜びと幸せにさよならなんて。  
ああ、何という日。ああ、この悲しみに満ちた時、  
神様に楯突いたばかりに。」

355

彼女がこう言い終わった時、夕食の支度を知らせに  
広間から小姓がやってきた。

小姓は扉を叩いて言った。

360

「お嬢様、お父上がすぐ参るようにと仰せです。

あまりに長い間臥せっておられるので案じておられます。

お祈りが余りに長すぎる、

神様方はお嬢様のお心の内を何もかもご存じだ、とおっしゃっておられま  
す。」

彼女は答えた。「いい子だからお父様の所へ行って、

365

お話がありますからすぐここへ来てくださるようお願いして。」

カルカスはすぐにやってきた。彼は尋ねた。「娘よ、どうしたのだ。」

彼女は答えた。「ああ、お父様、幸せはもはや過ぎ去りました。」

「一体何のことだ。」そこで彼女は、

自分の罪に対してキューピッドが行った復讐について、

370

私が物語ったとおりにすべてを語った。

カルカスは業病病みとなった彼女の変わり果てた顔を眺めた。

かつては百合のように純白であったその顔を。

カルカスは両手を握り締め、

ああ、生きながらえてこのような悲しみに遭おうとは、と叫んだ。

375

彼にはわかっていたのだった、クレセイドの病にはいかなる治療の術もない  
ことが。

そしてそのことがまた彼の苦しみを倍加した。

こうして二人の間には深い悲しみだけがあった。

父娘二人して長い間悲嘆に暮れた後、

クレセイドは言った。「お父様、私は今の有様を誰にも知られたくありません。

380

ですから私を、人に気づかれぬよう、

町外れの施療院へ行かせてください。

そうして私を哀れと思し召すならば、生きていけるだけの食べ物を

そこへ送り届けてくださいませ。この世の幸福はすべて

私から遠く去ってしまいました。これが私の悲しい定めなのです。」 385

こうしてクレセイドは、外套と海狸<sup>ビーバー</sup>の帽子に身を包み、

鉢と鳴子とを手に持った。

カルカスは秘密の門を静かに開け、

彼の館から半哩ほど離れた寒村へと、

誰にも気づかれぬように彼女を送り届けた。 390

そしてその施療院に彼女を託すと、

日毎にいくばくかの施し物を送り届けた。

そこには彼女がクレセイドであると知る者もいたが、

彼女の容貌があまりに醜く変わり果てていたために、その正体に気づかない  
者もいた。

彼女の顔面には一面に黒い腫れ物が広がり、 395

美しかった顔色も今は見る影もなく褪<sup>あ</sup>せ衰えていた。

だが、彼女の激しく断え間なく嘆き悲しむ様子から、

彼女は高貴な生まれにちがいないと誰もが推察した。

そういうわけで、彼らはより以上の善意をもって彼女を受け入れたのだった。

その日も暮れて、フィーバスがその臥所<sup>ふしど</sup>に引き上げると、 400

黒雲が空一面に垂れ込めた。

新参者のクレセイドが、どんな思いで  
 馴染めぬ宿ともてなしにあったか、一体誰が知ろう。  
 食べ物も飲み物もとらずに  
 彼女は一人、小屋の暗い片隅に横たわった。  
 そして涙ながらに悲しい胸のうちを一人嘆いた。

405

### クレセイドの嘆き

「おお、悲しみに沈み、嘆きの涙に暮れる私。  
 ああ、衰れなクレセイド。  
 この世のあらゆる喜びと楽しみはもはや永遠に失われてしまったのです。  
 今のおまえは、快活さも跡形なく消えうせて青ざめている。  
 どんな薬もこの苦しみを和らげ、治すことはできないのです。  
 運命は残忍、定めは過酷。  
 幸せは潰え、悲しみが芽を出すのです。  
 私が埋葬される時には、神様どうか、  
 ギリシアの方もトロイの方も、誰ひとり知らぬ土地に葬られますように。

410

415

きらびやかに飾りたてたおまえの部屋はどこへ行ったの。  
 美しい縫い取りの覆いをかけた大きな寝台のあるあの部屋は一体どこへ。  
 夜食にとった香料と葡萄酒、  
 金と銀とに輝く盃、  
 清潔な皿に芳<sup>かぐわ</sup>しいサフランソースをかけた  
 おいしい料理はどこへ行ったの。  
 きれいな洋服と豪華なガウン、  
 金の飾り針で留めるすてきな薄物ドレスはどこへ行ったの。  
 ああ、すべては遠くへ去ってしまった。そしてまた華やかなおまえの名声も。

420

緑萌え、花咲き乱れるおまえの庭はどこへ行ったの。 425

その花は女王フローラが、

庭の隅々にまで快活に絵筆をふるって咲かせたもの。

五月になるとおまえはそこを楽しく散策し、

日が昇る前に露を採り、

黒歌鳥くろうたどりや歌つくぐみのさえずに耳を傾けたものでした。 430

貴婦人達と歌い踊り、

一点の乱れもなく見事に正装した

王の騎士たちを眺めたものでした。

この世の花と称賛された

おまえの優れた名声も立派な評判も、 435

二つながらに潰えてしまいました。おまえの運命はこのように覆えされたの  
です。

高貴な身分は暗黒の淵へと落ちました。

おまえの素敵な部屋の代わりにこの病人小屋を、

寝台の代わりに藁束を取りなさい。

かつて楽しんだ極上の葡萄酒と食事の代わりには、 440

すえた梨酒と林檎酒、そしてかび臭いパンを取りなさい。

もはや物乞い鉢と鳴子の他には一切の物を失ってしまったのですから。

貴婦人達と連れだって歌を歌った

私のあの澄んだ声、優雅な歌声は、

鳥のように無気味なしわがれ声になってしまいました。 445

私の気品ある身のこなしには並ぶ者がなかったし、

快活さにおいても、私は誰にも負けることはありませんでした——

だのに今では、この顔は醜く変わり果て、

誰も私を正視しようとはしないのです。

悲しみに沈み、業病病み達の間に寝起きして、  
私が溜め息をついて言うことは、『ああ、』という言葉だけです。 450

おお、トロイの、そしてギリシアの御婦人方、  
よくよくご覧なさい。誰にもわからない私の悲惨な境遇を。  
移ろう運命を。私の不幸を。

何人にも救えない私の苦しみを。 455

間に合ううちに準備をなさい。最期の時が近づいているのです。

あなたがたの心の内に、私を鑑<sup>かがみ</sup>となさい。

あなたがたも今の私と同様に、

その権勢などは役にも立たず、私と同じ運命をたどるかもしれない。

いや、もっと悲惨な境遇があるならば、そこまで落ちるかもしれないのです  
から。 460

あなた方の美貌はやがて色褪せる花にすぎません。

優れた名声も、立派な評判も、

他人の耳に吹き込まれた息にすぎません。

バラ色の頬も腐肉に帰するのです。

あなた方の心の中に、教訓として私を覚えなさい。 465

この苦しみの生き証人である私を。

この世の富はすべて風のごとく飛び去るのです。

だから心しなさい。あなた方にも定めの時が近づいているのです。

運命はいつ不意に動き出すかもしれないのですから。」

こうして我が身の悲運を嘆きながら、 470

彼女はまんじりともせず一夜を泣き明かした。

だがそれもすべて詮ないこと。嘆いてみたとして泣いてみたとして、  
病が癒え、悲しみが和らぐはずもない。

業病病みの女が立って彼女の所へやってきた。

女は言った。「おまえ様はなぜ体を壁に打ち当てなされるのかね。 475

ご自分を危めるおつもりかね。償いをしようとはなさらないのかね。

泣いたところで悲しみはいや増すばかりだ。

潔くここの生活に入ってはどうかね。

鳴子を振って方々へ物乞いにでかけることも知らなきゃならない。

業病病みの掟に従って生きることだね。」 480

もはやなすすべもなく、彼女は彼等と共にでかけた。

あちらからこちらへと。寒さと余りの空腹のため、

彼女は本当の乞食になり果てた。

ちょうどその時、トロイルスを首領と仰ぐ

トロイの騎士の一団は、 485

勇猛果敢な活躍で

ギリシアの騎士数多を倒し、

大勝利と戦勝の名誉を手にして、

一路トロイへと堂々たる凱旋の途上にあった。

彼らはクレセイドが業病病みたちと共にいる所を通りかかった。 490

騎士の一団をみとめるや、

彼らは一斉に声を張り上げ、物乞い鉢をうち振った。

「旦那様方。神様のお慈悲にかけて、

なにとぞこの業病病みめにお恵みを。」

情け深いトロイルスは、この叫びを耳にすると 495



彼らを哀れに思った。彼はクレセイドが座る傍らを、  
それが誰であるのかを知らぬままに通りかかった。

その時クレセイドは両目でトロイルスを見上げた。

一瞥したその刹那、トロイルスは思った、

以前その女を見たことがあると。

500

もちろん今の彼女の姿では、その正体がわかるはずもない。

だが、彼女の顔つきは彼の心に、

かつての恋人クレセイドのいとおしい面影と

愛くるしい眼差しを呼び戻した。

彼が彼女の姿をそれほど速かに思い出したとしても

505

一体何の不思議があろうか。

というのも、姿形は、

記憶の中に深く彫り込まれると

外界を感知する諸感覚を惑わせる。

それで、心の中で形造られたとおりの似姿が

510

眼前に現れるのだ。

この時、彼の胸に愛の火花が走り、

彼の全身を炎と燃え上がらせた。

熱は高まり、汗と震えが彼の体を捕らえ、

今にも息絶えるかと思うほどであった。

515

楯を支えようにも胸に力はなく、

わずかの間に彼は幾度も顔色を変えた。

だが誰一人トロイルスのこの有様に気づく者はなかった。

騎士としての高潔な憐憫の情と

いとおいしいクレセイドへの思い出に動かされ、

520

トロイルスは腰帯から金貨の入った小袋と輝く宝石を取り、  
クレセイドの膝元に投げ与えた。

そして黙したまま馬を進めて立ち去った。

彼は、町へ帰り着くまでの間、ずっと物思いに沈み、

余りの悲しみのために、何度も落馬しそうになった。

525

業病病みの仲間達は、施し物の平等な分け前に預かろうと、  
クレセイドの所へ集まって来た。

だが、金貨を目にすると、

小声で互いに囁きあつた。

「一体どんなわけがあるのだろうか。あの旦那様は

530

俺達全部よりもあの女一人を大事に思っていらっしゃるようだ。

あの施し物はどうか。」

クレセイドは尋ねた。「あのお方はどなた。誰かご存じないこと。  
こんなに親切にいただいたあのお方は。」

男が答えた。「ああ、知っているとも。」

535

あれはトロイルス様だ。お優しく、お恵み深いお方だ。」

それがトロイルスであると知った時、

鋼はがねで突かれたよりも鋭い痛みが

クレセイドの心臓を貫き、彼女は悶絶して地に倒れた。

我に返ると、彼女は悲しく痛々しい溜め息をつき、

540

「ああ、」と繰り返し繰り返し悲痛な叫び声をあげた。

「嵐のような痛みが私の胸を襲う。

悲しみに包まれて、私は惨めな落ちぶれ女。もはや希望も尽き果てた。」

彼女は何度も何度も気を失った。

そして薄れる意識の中で彼女は叫んだ。

545

「ああ、不実なクレセイド、トロイルス様こそ真の騎士。

あなたの愛を、あなたの誠を、あなたの優しさを、

順境にあった私は軽んじていました。

多情な私は

移ろう運命の輪を高く登りつめたのです。

550

私があなたに誓った愛も操も、

その正体は軽薄で浮ついたものでした。

ああ、何て不実なクレセイド、トロイルス様こそ真の騎士。

私を愛するがゆえに、あなたは節を守り、

誠実と貞潔で身を律しておられました。

555

あなたは全女性の庇護者として、

彼女らの名誉を守られました。

だのに私の心は汚れた肉の情に溺れ、

淫らな色欲に浸っていました。

ああ、厭だ、何て不実なクレセイド、トロイルス様こそ真の騎士。

560

恋する殿方は皆、誰を愛するのか、

誰のために恋の痛みを忍ぶかにお気をつけなさい。

よくよく申し上げておきますが、

見返りに真実の愛を期待できる女はほとんどいないのです。

お望みならばお試しなさい。せっかくの苦労も水の泡と消えるのです。 565

ですからご忠告申し上げます。恋人は、掛け値なく、見たままのものとお考

えなさいと。

彼女らの節操は風に回る風見鶏のようなものですから、

私自身について申せば、私は自分の中に、ガラスのように脆く、  
とても移り気な心があることを知っています。

だから他の女達の中にも、同様に浮気で不実な  
裏切り心があることがわかるのです。 570

なるほど、なかには節操堅固な女もいるやもしれません。ですがそれは本当  
に稀なのです。

真の貞女を見つけだした殿御は、その御婦人を大いに賛美なさいませ。  
今はただ、私はこの私自身を責めるだけです。」

こう言い終わると、彼女は一枚の紙を手にして座った。 575

そして以下のように彼女の遺言をしたためた。

「今私は、私の亡骸を蛆と墓蛙とに、  
喰い裂かれるままに委ねます。

私が死んだら、物乞い鉢と鳴子、装身具、  
そして金貨は、業病病みの皆で分けてください。 580

私の亡骸は墓に埋めて下さい。

真紅のルビーを飾ったこの王家の指輪は、

トロイルス様が愛のしるしにと私に下さったもの。

この指輪は、私が死んだらトロイルス様にお返しいたします。

私の悲しみに満ちた死に様があの方に伝わりますように。 585

最後に、私は魂をダイアナに委ねます。彼女の住む場所で、

彼女と共に人気のない木立と泉とを巡りましょう。

もうこれで終わりにします。

おお、ダイオメイド、そなたはあの襟留め<sup>フロード</sup>と帯をお持ちですね。

トロイルス様が真の愛の証にと私にくださったあの大切な品々を。」

590

こう言い終わるや彼女はことされた。

程なく業病病みの男が指輪をはずし、

彼女の亡骸は速かに埋葬された。

男は直ちにその指輪をトロイルスのもとへ送り届け、

クレセイドの死を告げた。

595

トロイルスは

彼女の病と遺言、嘆き、

そして貧窮のどん底での死の模様を聞くと、

悲しみのあまり気を失い、倒れた。

彼の心臓は悲痛で張り裂けんばかりだった。

600

彼は悲しい溜め息をついて言った。「私にはもうどうすることもできぬ。

彼女は不実な女であった。そのことが悲しくてならぬ。」

人の話では、トロイルスは鈍色<sup>にびいろ</sup>の大理石で彼女の墓を作らせ、

彼女の名前と墓碑銘とを刻んで、

彼女が眠る墓に据えたということだ。

605

墓石には黄金の文字でこう書かれてあった。

「見よ、乙女らよ。都トロイのクレセイド、

一時<sup>ひととき</sup>は女らしさの典型と名高かりしその女、

業病を病みしその女、この石の下に死して眠る。」

さて、やんごとなき御婦人方、

610

皆様方の誉れと教訓のために語りましたこの短い物語。

この物語の中で私は、神の愛に照らして以下の戒めをお伝えしたい。

それは、愛の心を<sup>よこしま</sup> 邪な偽り心と決して交えてはならぬということ。  
 皆様方の心の内に、私がただ今語りましたクレセイドの  
 痛ましい末路をどうか銘記されますように。  
 彼女はこの世を去ったのですから、もうこれ以上は語りません。

615

## 注

- 1 内惑星である金星の、太陽からの最大離角は東西方向にそれぞれ48°であるので、西に沈む太陽と相対して金星が東に昇ることは、天文学的には起こりえない。ここでは、遊星の相対はあくまで占星術的な意味、すなわち天体の調和の乱れが地上に、あるいは肉体の上に及ぼすであろう不吉な出来事の予兆を示す、と解釈すべきであろう。 Cf. Jean Seznec, *The Survival of the Pagan Gods: the Mythological Tradition and Its Place in Renaissance Humanism and Art*, trans. Barbara F. Sessions (Princeton: Princeton University Press, 1972), pp. 84-121.
- 2 このクレセイドの発言をとりあげて、キューピッドが彼女を激しく非難すること (1. 283), また、彼女の目が血で濁され (1. 337), やがてトロイルスを識別できないほど視力が衰える (1. 490) ことからして、このクレセイドの発言には、ヘンリソンの作品展開上の意図的な創意が込められていると見るのが妥当なように思われる。 Cf. Douglas Gray, *Robert Henryson* (Leiden: E. J. Brill, 1979), p. 179.
- 3 Cf. Guillaume de Lorris and Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, ed. Felix Lecoy (Paris: Champion, 1970), I, 11. 1588-9. Geoffrey Chaucer, *The Romaunt of the Rose*, in *The Works of Geoffrey Chaucer*, ed. F. N. Robinson, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1966), 11. 1616-17.
- 4 チョーサーにおいてキューピッドはその王としての地位を賦与されている。 Cf. J. A. W. Bennett, *The Parliament of Fowles* (Oxford: The Clarendon Press, 1957), pp. 83-4.
- 5 Cf. Geoffrey Chaucer, *Troilus and Criseyde*, in *The Works of Geoffrey Chaucer*, Book III, l. 1370; Book V, 11. 1040, 1661.